

光と緑の風通信

発行/2008年10月25日 編集/福島県立医科大学看護学部 〒960-1295 福島市光が丘1番地 TEL024-547-1111(代)

アニバーサリー2008 記念式典開催

アニバーサリー 2008 記念式典が平成20年6月22日(日)、福島県立医科大学講堂で開催されました。

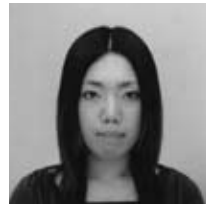


成果発表・記念演奏

開催日：平成20年11月2日(日)
会場：福島県文化センター 小ホール
日程：13時 開場
13時30分～ 記念コンサート
16時30分～ 成果発表



アニバーサリー 2008 記念式典を終えて



同窓会会長(開催当時) 4期生

田澤 智子

公立大学法人福島県立医科大学は、今年で看護学部設置から10周年、光が丘キャンパス移転20周年、並びに完全独立法人化を迎え、この度、記念事業としてアニ

バーサリー2008記念式典が開催されました。私は看護学部の4期生であり、卒業して4年が経ちました。現在は医科大学からは離れて市内で働いていますが、記念式典に参加させていただき、学生時代お世話になった先生方にお会いできても懐かしい気持ちになりました。また、「知事と語る福島県立医科大学の未来」の座談会においては、学生の方が活発に意見を述べられていて、「自分が学生だった頃はこんなにはしゃぎまわっていたらどうか」と反省してしまっ

た。看護学部同窓生も600名を超え、大きな同窓会となりました。卒業生一同、これからも母校を応援し、後輩の皆さんをサポートしていきたいと思っております。母校への最大の贈り物は、卒業生が医療の現場で活躍し、社会に貢献することです。それが何よりも心強い後輩への激励となります。記念式典にあたり、ご支援いただいた多くの皆様方に感謝いたします。

(たざわ ともこ)

知事との座談会に参加して



3年 鳴原 利洋

福島県立医科大学アニバーサリー2008の記念事業として「知事と語る福島県立医科大学の未来」という座談会が行われた。私の中では知事と話ができる機会は人生の中ではなかなかかわからないくらい貴重なものであり、せっかくの機会なので「自分の思っている事、考えている事、ありのまま話そう」という意気込みで参加した。実際、人前で自分の思っている事を相手に理解してもらえないように話すのは難しく、座談会の最

真っ白になってしまった事を今でも覚えている。しかし、こういった経験も自分にとっては貴重な体験であり、大切な思い出となった。

この座談会を通して、福島県立医科大学を卒業し、他の地域で働いていた人達が、将来的に福島県に「戻って来たい」と思えるような職場環境や職場の受け入れ体制を整える必要がある。また、学生時代にもっと福島県に興味を持てるような教育をしていくことが医師・看護師不足といった問題を解決する一つの手段であると考えた。そして、「私は福島県でこういったことをしたい」「福島県をこういったものに変えていきたい」というように目的意識を持った人をいかに増やしていけるかが、今後の福島県立医科大学や福島県の課題であると思う。

(しぎはら としひろ)



平成20年7月5日(土) 13:00~16:00

セッション1:看護学部紹介
◆入試概要、国家試験・進路状況説明
◆ミニセッション:看護学部で学ぶこと・学生生活等について

セッション2:模擬講義
◆「赤ちゃんは、なぜみずみずしいのか〜母と子の絆から考える〜」
家族看護学部門教授 太田 操

セッション3:施設見学・体験・質問相談コーナー
◆「セルフケアとこころの健康」ケアシステム開発部門准教授 大竹 眞裕美



看護師として働きはじめて

東京大学医学部附属病院 看護師
三浦 希美



私は三月に卒業して、現在、肝胆膵外科、人工臓器移植外科という病棟で、看護師として働いています。癌に対する、化学療法や外科的治療の他に、生体肝移植や脳死からの肝移植等も行っている病棟で、今はまだ、業務や技術を覚えることに必死ですが、患者さんに接するときは、いくら新人とは言え、ひとりの看護師であるということを忘れず、責任をもって接するように意識しています。

看護師として働き始めて、自分の知識や技術のなさに落ち込むことも多くあります。でも、そんなとき支えになってくれるのは、学生時代の先生や友人、部活の先輩や後輩、そして家族です。学生のみならず、大学生生活を有意義に過ごし、身近な人とのつながりを大切にしていきたい。きつと、そのつながりがいつかみなさんの支えになると思います。

学生のときは違い、毎日数人の患者さんを受け持つため、優先順位をうまくつけられなかったり、情報収集が不足していたりすることもあって、難しさも感じます。そして、日々学習を続けなければ、患者さんに良い看護を提供することはできません。私も、これからも毎日を大切に過ごし、日々たくさんの方を学んでいきたいと思っています。

(みつら のぞみ)

卒業生の近況報告

卒業後の状況報告

郡山市介護保険課地域支援係 保健技師
矢沢 樹里



私が大学を卒業してから早くも7年が経過しました。看護職として必死に過ごした7年は長いようであつたという年の年数でした。

卒業後すぐに就職したのは仙台市にある東北大病院です。こちらでは呼吸器内科と消化器内科の病棟に勤務し4年間お世話になりました。特定機能病院ということもあり、最先端の医療技術に触れながら、病氣と対峙する患者さんから学んだことは職場の変わった現在も非常に大切な経験です。

現在は地元の郡山市で保健師として働いています。特に高齢者の健康寿命をのばす介護予防事業に携わっています。看護師と保健師の業務は一見全く違う業務に見えます。しかし、実際に働いてみるとそうではな

く、大きな関連があります。例えば看護職として患者さんが退院後どんな地域サービスが利用できるか、そのためにどんな準備が必要か知らなくて適切な退院指導ができませんか。例えば保健師として住民が現在の生活を続けると健康状態がどのように妨げられ、どんな治療を受けなければならなくなるのか、分からなくて効果的な健康指導ができるでしょうか。もちろん日進月歩の速さで医療技術が向上し、制度がめまぐるしく変わっている現在、就職後も学び続けることは必要ですが、大学生活で

基本的なことを得られたのと得られないのではその後の理解が変わってくると思います。

もし、学生の立場でこの近況報告をお読みの方は、残された大学生活の中で看護職としてトータルな学びを得られるよう期待したいと思えます。そして、同じ卒業生の立場の方、これからも大学生活で得られた経験を基に看護学部が誇りと思えるようにそれぞれの立場でともに頑張っていきたいと思います。

(やさわ じゅり)

看護師として働いて

福島県立医科大学附属病院 看護師
齋藤 もも子



私が看護師として働き始めて5ヶ月が経とうとしています。私は現在、福島県立医科大学附属病院の、皮膚科・形成外科・消化器外科が入った病棟で働いています。実習では回らなかった科もあるため、配属先が発表された時は戸惑いもありましたが、徐々に病棟の雰囲気にも慣れ、少しずつですが、日々の業務も分かるようになってきたと感じています。

私が働いている病棟では、患者さんの年齢層が小児から高齢者までと幅広く、疾患の種類も様々です。学生の頃の実習とは違い、何人もの患者さんを受け持つことになるため、一人ひとりを、時間をかけて理解していくことが難しく、なぜもっと患者さんの立場に立った行動が取

れなかったのか、もっと良い方法はなかったのかと反省する毎日です。思うように行かないことも多く、落ち込む日もあります。そんな時に支えになっているのが大学時代に一緒に頑張ってきた友達や、4年間、部活動を通して学んできた経験です。何気なく過ごしていた大学生活ですが、これからの自分の支えとなる大切な時間だったのだと感じます。

まだまだ不安なことも多く、勉強しなくてはならないこともたくさんありますが、少しでも患者さんの支えとなる存在になれるよう、頑張りたいと思います。そして、学生の頃に感じたことや初心を忘れず、人との出会いを大切にしながら、人間としても成長していきたいと思っています。

(さいとう ももこ)

看護学部へようこそ

生命科学部門 加藤 清司



看護学部オープンキャンパスは、入学を希望する高校生の皆様に本学部について知っていただくことを目的に、学部内教職員全員参加とボランティアの学生諸君の協力によって開催しています。本年は引率の先生方や保護者の皆様を含め300人を大きく超える方々に参加していただきました。本学部への益々の関心の高まりを感じています。

セッション1の学部紹介では、メイン会場のN301講義室に入りきれない皆さんにはS301講義室で同時放送を見ていただきました。セッション2では、はじめての試みとして2つの講義室のそれぞれで模擬講義を行いました。セッション3では、体験コーナーは学部内の実習室をフルに活用して実施しましたが、どのコーナーも多くの参加者で賑わいました。質問・相談コーナーでは特に先輩学生とのフリートークキングに人気集中していたようです。

参加された高校生の皆さんは本学部への思いをさらに深められたことでしょう。新入生として私たちの目の前に現れてくれる日を心待ちにしています。

(かとう きよし)



模擬講義を担当して

ケアシステム開発部門 大竹 眞裕美

今年は、2会場(200名収容のN301講義室とS301講義室)に分かれ、「赤ちゃんは、なぜみずみずしいのか(母性看護学)」と2本立てでの模擬講義が組まれていました。私は、「こころの健康とセルフケア」と題し、S301講義室での講義担当に決まり90部の資料を準備しましたが、当日は椅子や資料の追加が必要という状況に少し驚きました。とは言え、梅雨とは思えぬ暑さの中、看護学部に関心をもっている高校生(そしてご家族)が沢山来て下さったことをうれしく思いました。

模擬講義では、2年次前期の「精神看護論1(精神保健看護論)」に含まれる内容で、日常の生活行動とこころの状態の関係を取り上げ、クシートを資料として準備し、自分の場合はどうだろうか?と会場の高校生にも考えてもらいました。オープンキャンパスに参加した、「人間」に関わる仕事である看護を志す来校者の中に、自分と向き合い、考えながら学びを深める面白さを感じてくれた人がいて、看護学部で学びたいと意志をかためた人がいたらうれしいな...というのが、模擬講義を担当しての感想です。

(おおたけ まゆみ)

触れて見る・聴いて見る! 体験コーナー

ケアシステム開発部門 野田 智子

看護ってどんな勉強をするのかな?白衣を着てどんな実習をするのかな?高校生のみなさんに実際に体験してもらったため、実習室では学生有志と各専門領域の教員とで様々な体験コーナーを設けました。「老人体験」では、おもりの入ったスーツを着たり、白内障ゴーグルをかけてのぬり絵で高齢者の色彩の知覚の変化を感じてもらい、地域看護学では「在宅での看護」として食

事や入浴・排泄などの生活環境の工夫の体験、その他は「妊婦体験」「沐浴体験」「注射の演習の実際」「血圧測定」「救急蘇生」「子どもの抱っこ体験」などがありました。赤ちゃんのふれあいコーナーでは教員の子供も登場し、無垢な魅力を放ち大盛況でした。どのコーナーでも学生は、学んだことを丁寧に正確に自信を持って、訪れた高校生に笑顔で説明・実演しており、一歩先ゆく先輩の貫禄を感じました。高校生も、初めての体験にドキドキしながらも、いきいきとした先輩の姿を通して、新鮮な驚きと知る楽しさを感じ、学部での学びに一層胸を膨らませたことと思います。

(のだ ちよこ)



大学に入学して



1年 宍戸 美穂

ずっと目指していた福島医大に入学し、早5ヶ月が経ちました。始めは、医大に合格できた実感さえも掴めないままのスタートでしたが、次第に大学生活にも慣れ、今は勉強にも部活動にも主力投球で、充実した日々を送ることができています。私は今、経験豊かな先生方がたくさんい

らっしゃる、とても恵まれた環境の中で、教養をはじめとした看護学を学んでいきます。それらの学びは、どれも将来の為に大切なことばかりで、日々そのひとつひとつを自分の中に吸収できるように努力しています。また、医大は人と人とのつながりが深く、毎日、先生・先輩・友達と、いろいろな人との関わりの中で自分を成長させてもらっていると感じています。このことも4年後、人と関わる仕事をしていくにあたって、とても大切な学びだと思っています。そしてこれからも、入学したときの気持ちを忘れることなく、大学での学びを大切に頑張っていきたいと思っています。(しほ みほ)

大学・大学院に入学して



大学院1年 佐藤 郁美

4月に大学院に入学し、あつという間に半年が過ぎようとしています。看護師として働き始めて7年経ちますが、その中で最も早く感じた期間でもありません。入学当初は、長い間勉強に使っていなかった頭に、先生方の言葉や文献の文字を詰り込めようと苦勞し、こんなことで

ついでいけるのかと頭が真っ白になったことを覚えていました。私は看護学校で教育を受けてきたので、大学というところは未知の世界でした。教育についての考え方そのものがまったく別のものに感じられ、半年経った今でも驚きの連続です。やっていけるのかと落ち込むことも日常茶飯事です。そんな中でも、大学院の同級生や先輩たちのお互いの励まし合いや、学業仕事における情報交換などが、今の私にとって刺激や心の支えとなっております。頑張ろうという気持ちが湧いてきます。このままであつという間に3年間で過ぎて行きそうですが、私の人生にとって実りのある期間にしたいと思っています。(まどう いくみ)

海外留学生からの近況レポート



教えてくれて、
ありがとう！

県費留学生
吉田すみれリンド
(Linda Sumire Yoshida)

みなさん、こんにちは。私は日系三世、吉田すみれリンドです。ブラジルのサンパウロ州モジダスクリゼス市からまいりました。父方の祖父は福島県いわき市の生まれであり、母方の祖父は長野県の生まれです。祖父(父方)は結婚して、1930年7月23日にブラジルに移住しました。ブラジルでは様々な野菜を作る農業をやっています。

それから、78年後に孫娘である私が祖父のふるさとに生まれました。私は以前から日本に留学したいと思っていました。ブラジルには福島県人会があり、留学できるシステムがあります。そこで、チャンスを見ながら、3回目のトライで、無事に留学の後のチャンスと想っていました。無事に留学のチャンスをつかむことができ、本大学院(福島県立医科大学大学院看護学研究科)の研究生になることができました。

私は、ブラジルで8年間、ICU(Intensive Care Unit:集中治療室)の看護師として働いていました。その経験を生かして、現在、医科大学附属病院のICUと救命救急センターで週1回の研修を受けており、素晴らしい経験をしています。看護への情熱をさらに強化することができました。またブラジルと日本の看護師の

活動のあり方が少し違うこともわかりました。ブラジルでは看護師の人数がまだ十分でないこともあり、看護助手が清拭、体位交換、移送、与薬などを代行し、看護師は看護プランニングや時間注射の注入、ガーゼ交換の処置等に時間を費やします。しかし、ブラジルも日本も、患者の生活背景を大切にしながら看護を提供することを重要視している点は同じです。私も患者の生活やその方が生きてきた文化的な背景を大切にして、看護を実践したいと考えています。そこで、今回の留学期間で、日本の文化、とりわけ福島の文化を知るとともに、日本における看護師のアセスメントならびに看護診断のプロセスを明らかにして、ブラジルと比較していきたいと考えています。祖父や父母のおかげで、私はブラジルでも日本人が多く暮らしているコミュニティで生活し、日本の文化を覚えてもらい、日本的な生活様式を維持しています。そのため、今回の留学でも、日本での生活は困りませんでした。でも、とても難しいと感じたのは漢字です。生活の中で目にする漢字が読めないことは多いですが、この数ヶ月で少し分かるようになりました。今は福島市で一人暮らしをしています。インターネットやメールなどを使い、ブラジルの家族や友達ともやりとりができています。距離をあまり感じません。日本でも友達を作りたいと思っています。

私はICUで働くことにほこりをもっており、看護を愛して、将来的にはICU看護を極めたいと思っています。福島での生活も5か月が過ぎ、後7か月間を残すばかりとなりました。この一年間で、日本の生活や看護について勉強し、これからの看護に生かしたいと考えています。(よしだ すみれ りんた)



基礎看護学実習を終えて

2年 長谷川 恵理

基礎看護学実習を終え、授業とはまた違う、多くのことを学び、私にとって本当に得るもの大きい実習となった。受け持つことになった患者さんに積極的な関心を持って、今の自分には何ができるかを考え、二週間を過ごすことができた。なかでも一番の学びは、一人の患者さんに向き合うことは難しいことであるが、とても大切なことであるというところである。患者さんが抱えている想いをさっさと受けられるよう、信頼関係を築いていくことが、看護において、とても重

要なことであると理解できた。患者さんの何気ない一言にも、普段見ているだけではわからない想いがあるかもしれない。そのことに気づいて、そしてその想いを受け止めたうえで、看護が大切であることを学んだ。この実習で多くのことを学ぶことができた一方で、自分には、これから学ぶべきことがたくさんあると課題を感じた。これからの授業により一層意欲的に臨み、自分が理想とする看護師になれるよう努力していきたい。(はせがわ えり)

実習を通して学んだこと



障がい者看護学実習を終えて

4年 船木 結衣

脳梗塞による左片麻痺の患者さんを受け持たせていただきました。その方はリハビリを重点的に行っており、リハビリスタッフの方々が積極的に関わっていました。だからといって看護師はリハビリに関しては任せていいわけではありません。その方の日常生活を一番理解しているのは看護師であり、変化に気づきやすいのも看護師です。ADLはリハビリの時間にできれば良いのではなく、日常生活に適応しなければADLの拡大とはいえません。そうしたことから看

護師は患者さんの日常生活を通してADL拡大を図っていく役割があると学びました。また、そのためには他職種が互いに目標を共有し、連携をし、それぞれが専門性を発揮したチームアプローチによって患者さんを総合的に捉え援助することが必要であると学びました。障がいは身体にだけでなく、患者さんや家族の心にも深い傷を作り出す。障がいと共に生きていくことになる患者さんや家族の気持ちに寄り添うことで精神的サポートをしていくことも大切であると痛感しました。(ふなき ゆい)

療養者を含めた家族看護の実践

4年 小園 茉莉子



「看護の対象は療養者を含めた家族」という視点を持って今回、訪問看護ステーションにおいて実習をさせていただいた。どの家族にも今まで築きあげられてきた家族の歴史があり家族の一員が病に倒れるということは、危機的な出来事であり、家族全員に大きく影響が及ぼされるということが分かった。実習を通して様々な家族と向き合い、自分の価値観で否定的に判断し

てしまうこともあったが、家族に正しい「家族」なんてないと考えられようになった。「ひどい」と認識されることでも、その行動をとってしまうことには根拠があることを私たちは忘れてはいけない。問題を抱える家族に対処力があれば見守り、問題が分からず葛藤している家族には介入していくことが必要となる。大切なことは療養者を含めた「家族」に目を向けてみることであり、自分の価値観に捉われず、家族の一人一人に目を向け家族全体と向き合っていく必要を援助を行っていくことであると思った。今回の学びを自分の看護に応用し、広い視野と寛容な心を持って療養者を含めた家族を見つめていけるよう看護者として成長していきたいと思う。(この まりこ)

地域看護学習を終えて

4年 黒川 恵梨



5月に約3週間、矢吹町の保健センターで実習をさせていただきました。実際に行なわれている事業に参加させていただき、これまでに経験してきた病院実習からだけでは知りえなかった多くの学びを得ることが出来ました。住民の健康を病院という場だけで守っていくことは不可能であるということをこれまでの病院実習で実感しており、では何が必要なのか?ということ

を常々考えていました。地域実習を終えた現在では、地域の保健師の担っている役割がその答えであると思います。(くろかわ えり)

研究・活動紹介

各部門を構成する教員が教育業務以外にそれぞれの専門分野の特色を活かした研究や地域貢献を行っています。

研究会オープンマインドは通称「なすの会」と呼ばれています



家族看護学部門 太田 操

「なすの会」という名前には「美味、美味しいナスに育ちましょう」という意味が込められています。駄洒落のようですが、これには深い訳があるのです。ナスには丸いや長いなどいろいろな形があります。何と日本だけでも100種類以上あるそうです。それぞれに特徴があり適した調理法があります。各々の個性を生かした美味しい食べ方があるように、私たちもいろんな形があつて良いじゃない、ということなのです。

それからナスにちなんだ数多くの諺がありますね。「秋なすは嫁に食わずな」は有名ですが、他にも「富士、二鷹、三茄子」と縁起の良い初夢に登場したり、「瓜の蔓に茄子は

がん看護専門看護師活動をはじめて



応用看護学部門 三浦 浅子

4月から、応用看護学部門と附属病院看護部の兼務で、がん看護専門看護師(候補生)

ならない」「親の言葉と茄子の花は千に一つの無駄もない」などはナスが優れたものとして扱われています。このような訳で「なすの会」のモットーは「A Self-disciplinary Study Group of Nursing」とも学びともに自分を育てる。です。現在、会員は約50名、看護に関する講演会やセミナーを年間5〜6回開催しています。会員以外の参加もOKです。どんな会なのか、ぜひ覗いてみて下さい。決して茄子料理の講習会ではありません。(おおた みさお)

の活動をはじめています。専門看護師(CNS: Certified Nurse Specialist)としての活動には、実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究という6つの役割があり、私は7月〜8月にかけて、主に教育活動を行っています。まずは、がん看護のONSの実習を附属病院で行うことになり、科目等履修生の2名に關わっています。実習生が主体的に活動できるように支援すること、ONSの活動の糸口をつかめたような気がしています。2つめとして、福島県がん看護臨床実務研修にも関わらせていただいています。この研修生の実習を通して、附属病院で入院加療されているがん患者の状況を知ることができました。この教育活動は、附属病院における私のONS活動の基礎作りだったと思います。今後、がん看護に携わっている皆様方を支援できるようなONSの活動を行っていきたくと思っていますので、よろしくお願ひします。(みづら あきこ)

看護学部カレンダー

- 10月29日(水) 解剖慰霊祭(1年次)
- 11月 1日(土) 光ヶ丘祭
- 11月 2日(日)
- 11月29日(土) 特別選抜入学試験
- 12月22日(月) 冬季休業
- 1月 9日(金)
- 1月13日(火) 後期試験
- 1月23日(金) (4年次・編入4年次)
- 1月17日(土) 大学入試
- 1月18日(日) センター試験
- 2月16日(月) 後期試験
- 2月27日(金) (1・2年次・編入3年次)
- 2月23日(月) 後期試験(3年次)
- 2月27日(金)
- 2月25日(水) 一般選抜試験
- 2月26日(木) (前期日程)

編集後記

一段と秋深まるなか、光と緑の風通信第32号をお届けいたします。看護学部設置から10年の節目にあたり、看護系大学の数も開設当時は63校であったのが、現在では167校に増えています。母校の開設当時を懐かしみつつ、10年後を想像してみますが、個性のある活力に満ちた看護

編集委員

- 委員長 林 正幸
- 本多たかし
- 横田 素美
- 田中 克枝
- 飯塚 麻紀
- 野田 智子
- 濱尾 早苗
- 根本 奈々
- 庄司真奈美

学部が発展していくことを願っています。最後に、お忙しいなか寄稿して頂いた、たくさんの方々に深く感謝いたします。(ねもと なな)

海外研修報告

第28回 ICM(国際助産師連盟)大会参加と英国の産科施設を見学して

家族看護学部門 石田 登喜子



▲左から2番目番着

「助産―女性・新生児のために世界規模での取り組みを」を大会テーマに、平成20年6月1日から5日間、グラスゴー(英)で開催されたICM大会に参加しました。世界95カ国から約4,000人の助産師が集まり、女性の意見、母体と新生児の健康を考えた生殖及び分娩技術、助産技術の向上など、日々のプログラムに沿って基調講演とワークショップが行われました。どの会場も用意された椅子には座りきれず、立つたまま、あるいは床に座って熱心な質疑が繰り広げられました。大会4日目の夕方、1965年に設置されたQueen Mother Hospitalを見学しました。LDR7室と手術室2室、NICU、妊産婦のためのDay care centerを備え、助産師300名で、年間約3,500件の出産と、毎月1,000件の母子相談を扱う他、母乳育児やグリーフ・ケアにも力を入れているそうです。案内してくれた助産師は「イギリスの助産師は世界のボス」と言い切り、自信と誇りが感じられました。(いしだ とよこ)